三原山とともに生きあらたな前進を図る東京都大島町

三原山の噴火や台風の被害、そしてコロナ禍。幾多の困難から立ち上がり、未来を見つめる。東京から一番近い離島、伊豆大島の東京都大島町では、地元を思う人々の活動が、その根を広げようとしている。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

東京都大島町の要である三原山。長い歳月のうちには、噴火により住民の平穏な暮らしを脅かすこともあった一方で、一帯がジオパークの認定を受けるほど、地球の活動をリアルに感じさせるすばらしい景観と生態系を育み、大島に恵みをもたらしてきた。

東京都心の竹芝客船ターミナルと大島間を片道約2時間で結ぶジェット船は、静岡県の熱海や同じ伊豆諸島の利島（としま）、新島（にいじま）などとの間もつないでいる。

噴火や台風、コロナ禍の打撃から立ち上がり、その先を目指す

東京・竹芝客船ターミナルから、最速で一時間四五分。伊豆諸島内で最大の伊豆大島全域を町域とする東京都大島町は、東京からもっとも近くに位置する離島だ。人口約七三〇〇人が暮らす島の周囲は、五二キロメートルほど。その中心部にそびえるのは標高七五八メートルの三原山だ。伊豆大島は、全町民が島外避難を余儀なくされた昭和六十一年（一九八六）をはじめ幾度となく噴火を繰り返し、人々はその火柱や噴き上がる様子を「御神火（ごじんか）様」と尊び、あがめてきた。

死者・行方不明者三九名、被災家屋四〇〇戸という甚大な被害をもたらした平成二十五年（二〇一三）の台風二六号など、風水害の被害にもたびたびみまわれたと話すのは、町長の三辻（みつじ）利弘氏だ。

「大島の暮らしは噴火や台風といった自然災害と隣り合わせだということを、島民の皆さんは分かっています。しかし過去の経験を忘れないよう、全島民が避難した十一月二十一日を町の防災の日として条例を定め、防災訓練や講演会などを通して防災意識の普及・高揚に努めています。台風二六号の記憶もまた先々に伝えていくため、令和三年（二〇二一）五月に、土砂災害の現場に『大島町メモリアル公園』を造りました」

島の主力産業であり、大きな支えとなっているのが観光業。定期航路が開設された明治末期以降、与謝野鉄幹・晶子夫妻をはじめ多くの文人墨客が島の風俗やそこに流れるひとときを愛してこの地を訪れた。昭和初期には『波浮（はぶ）の港』、昭和四十年代には『アンコ椿は恋の花』といった流行歌が人々を当地へと誘った。折からの離島ブームも重なり、昭和四十八年（一九七三）のピーク時には約八三万人の来島者を数えたが、その後は同ブームの衰退やレジャーの多様化により減少傾向をたどっていた中、コロナ禍が追い打ちをかけ、令和二年度（二〇二〇年度）の来島者数は約一三万人と厳しい状況が続いている。

「コロナ禍というピンチをチャンスに変えるには、この島が『東京に一番近い島』そして『三原山を中心とした自然』という強みを持っていることを改めて思い起こすことが大事です。その強みに磨きをかけるべく、島のブランド化をこれまで以上に進めていく必要があります。平成二十二年（二〇一〇）の伊豆大島ジオパーク（注）認定はブランド化の中核。ジオパーク認定を最大限に生かし、地域の経済活動と結びつけながら島の魅力を分かりやすく伝えつつ、観光面の環境の整備を進める。それによりリピーター、ある

「大地の成り立ちや特徴を知り、そこで育まれた景観や動植物、人々の暮らしを守りながら持続的な地域の発展に取り組むというジオパークの基本理念は、まちづくり全般に通じる」と話す町長の三辻利弘氏。

2013年の台風26号で大きな被害を受けた元町神達（もとまちかんだち）地区には、2021年5月に大島町メモリアル公園が開園。公園の高台には慰霊碑が立つ。（写真提供：大島町）

（注）ジオパークとは、「地球・大地（ジオ）」と「公園（パーク）」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味する。2021年4月現在、43地域の日本ジオパークが日本ジオパーク委員会によって認定されている。

大島誕生以前に存在した、火山の一部だった筆島。その名は、筆先に似た形状に由来する。

「アンコ椿は恋の花」で知られる「あんこ」とは地元の言葉でお姉さんの意味。その昔は作業着だった絣の着物、前垂れ、手ぬぐい姿の女性たちが、現在は「あんこさん」として観光の場などでもてなし役を担う。

（写真提供：大島町）

いは滞在型の来島者を増やすという『数から質の観光への転換』へとつなげていきたいですね。今後の大島が生き残っていくための道はそれしかないと思っています」

伊豆大島ジオパークは生きている地球を感じられる場所

伊豆大島ジオパークの見どころは島内に広く点在するが、その雄大な景色にもっとも圧倒されるのは三原山エリアだろう。火口を望める展望台まではハイキングコースが整備され、散策を楽しめる。さらには火山の島である大島の成り立ちや独自の生態系などを分かりやすく語るジオガイドと歩けば、自然のダイナミズムを一層感じることができる。大島のジオガイドの一人、グローバルネイチャークラブの西谷香奈氏は、伊豆大島ジオパークの魅力をこう語る。

「三原山は人間でいうとまだ五歳くらいの若い活火山ですから、活発に噴火を繰り返しています。そのたびに地形は変わりますし、荒れ地になった場所で植物などの生態系が歳月をかけて再生していく過程が見られるんです。まさに地球が生きていることを実感できるのが大島の魅力。毎回のツアーが新しい発見の連続です。山のあちこちから噴気が上がり、年々変わりゆく一期一会ともいうべきこの景色を、私自身が歩くたびに楽しんでいます」

かつて大島の玄関口としてにぎわった島南部の波浮地区は、明治時代に建てられた「旧甚の丸邸」（下）をはじめ当時の面影を残す古い町並みが続く。

西谷氏は、ツアーでの新しい発見、島の自然の魅力を三六五日欠かさずブログ（インターネット上の日記）で伝え続ける（本年三月末時点）。そうしたブログを見て来島する人もいるとか。コロナ禍の現在は、これまでのような実地でのツアーは減っているが、オンラインのガイドツアーを実施し人気を呼んでいる。

また、ジオパークになってから、地元の子どもたちが火山の魅力

ジオガイドとして伊豆大島ジオパークの奥深さを説く西谷香奈氏。海、森、活火山と多彩な自然環境がコンパクトな島内にそろう大島は、ジオの学習に適していると話す。

島内ではバウムクーヘンのようにきれいに層を成した地層があちらこちらで見られ、大地の変遷を間近で見ることができる。

を学ぶ場がつくられるようになった、と西谷氏は喜ぶ。

「小中学校の校外学習のほか、立体模型を使い噴火や防災を学ぶ親子イベント、地元料理を作りながら食とジオのつながりを学ぶイベントなど、幅広い内容の活動が行われています。大人も子どもも伊豆大島の価値を理解して誇りをもって生きてほしい、と思いますね。植物も人の暮らしも、噴火のたびに毎回よみがえっている。その島の営みこそが大島の一番の魅力だと思っています」

1986年の噴火の際は溶岩が住宅地近くまで迫ったが、それ以降、現在まで三原山は静かなたたずまいを見せている。噴火口周辺には散策ルートが設けられ、天気に恵まれれば伊豆半島、三浦半島、富士山などを望むことができる。（写真提供〈上〉：大島町）

小さくもさまざまな可能性を秘めた椿の木と椿油への期待

三原山同様に大島の景色に欠かせないのが、椿の存在。島内に育つ約三〇〇万本もの椿の実から採れる椿油は、大島の特産品の代表格だ。

昭和四年（一九二九）創業の高田製油所では、大正時代から受け継がれてきた油圧ポンプを使い、今や希少な玉締めの手法で搾油している。同製油所の四代目・高田義土氏はこう話す。

「大島では食用、灯用、薬用など生活の中で椿の油を使う風習がありました。その椿の木を、年中島に吹く強い風から農作物などを守るために、防風林として島中に植えたのです。ただ椿の木は実りまで最低でも一五年かかるなど成長が遅いため、生業としての椿栽培は成り立たない。そこで島民が副業として、秋になると椿の実を拾い集め、持ち込まれたものを当社が買うわけです。持ち込まれる量やタイミングは事前に分かりません」

このように高田製油所が仕入れをコントロールできないことに加え、実の選別や乾燥から搾油、濾過、充填を含めて手作業が基本のため生産量は限られると高田氏は言う。

「当社は、大島産の椿だけを使って製品をつくっていますから、製品の質や量をこれ以上高め、ビジネスとして、あらたな展開をしていくことは難しい。椿油づくりは、商売ではなく伝統文化の継承と思っています」

高田氏は若い一時期、島を離れて暮らしていたが、諸般の事情で製油所の跡を継ぐことに。継いで一五年の歳月が過ぎた今、ビジネスとしての広がりや伝統文化としての継承に難しさを感じつつも、昔ながらの手法でゆっくりと搾る自社の椿油の評価の高さを日々実感しているという。

そうした中、高田氏は島内のあらたな動きとして、飲食店による椿油の使用が広がりを見せつつあることに注目しているという。

「椿油の美容効果は知られていますが、島では昔から家庭の台所で使われてきました。当社でも食用油を製造していますが、糖質が

椿の実の選別から圧搾作業まで５日間かかると話す、高田製油所の高田義土氏。パッケージングまでを含めれば、１瓶の椿油の製造に約２週間の手間暇を要するという。

高田製油所の椿油は、粉砕して蒸した椿の実を、油圧ポンプを使った圧搾機でゆっくり圧力を加えて圧搾する。作業中、製油所内は圧搾された椿油の甘やかな香りに満たされる。

高く香りも甘やかで、味わいにコクが出ると評判です」

コロナ禍で歩みが不透明な部分はあるが、椿の炭作りを復活させる話や、島内の若手養豚家が椿油の搾りかすを飼料として育てた豚の商品化を目指しているという話もあり、興味深い。

「椿の木は硬いので、非常に上質な炭が焼けます。大島への来島者には自然の中でバーベキューを楽しむ方が多いので、椿の炭作りが復活すれば、大島の自然と椿で観光客をおもてなしできると期待しています。

椿の炭で椿油を使った料理を作る。その食材には椿油の搾りかすで育てた豚を使う。大島の代名詞であり、島とともに生きてきた椿が、島の食や観光活性化の一翼を担えるとしたらうれしいですね」

復活を遂げた畜産業により地元の牛乳が子どもたちを育む

さて、椿油と並び人気の高い大島の土産物に、牛乳をたっぷり使う「牛乳煎餅」がある。なぜ大島で牛乳かと思われるかもしれないが、畜産業もまたかつては島の伝統産業だったと振り返るのは、株式会社大島牛乳代表取締役の白井嘉則氏だ。

白井氏によれば、明治維新後に税金が物納から貨幣納付へと変わった際、安定した現金収入の糧として注目されたのが畜産業だったという。

「海に囲まれた大島は一年中、潮風が吹きます。乳牛は暑さに弱いのですが、その風が気温を下げてくれますし、潮風は乳牛の成育に必要な塩分も含んでいます。加えて大島には乳牛が好む草が通年茂ります。また牛の糞は、火山灰でできた大地を豊かにする堆肥として役立つなど、乳牛の生育地としてうってつけの地でした」

最盛期の大正末期から昭和初期にかけては千頭以上もの牛が飼われて牛乳やバターがつくられ、「東洋のホルスタイン島」とも呼ばれたほど畜産業は隆盛を誇る。しかし第二次世界大戦後は、大手乳業メーカーとの価格競争が激化し、次第に衰退。紆余曲折を経た平成十六年（二〇〇四）には大島牛乳の製造工場が閉鎖に追い込まれる。

その後の平成十九年（二〇〇七）、畜産業と牛乳製造存続のためにと、当時町議会議長だった白井氏が立ち上がり、行政や地元有志の支援を受けて創業したのが株式会社大島牛乳だ。

「島の特産品である牛乳煎餅の材料として欠かせないのはもちろんですが、安心・安全という観点、子どもたちが地元の牛乳で育つ食育の面でも、将来にわたり残していくべき町の大事な資産だという強い思いがありました」

現在は約四〇頭の乳牛が放牧され、その恵みである大島牛乳は大島町と隣の利島の小中学校の給食で提供されている。少量生産だけに価格は少々高めだが、島の土産

現在の大島牛乳の商品は牛乳、バター、アイス。今後の畜産業存続のためには、ヨーグルトやチーズといったあらたな乳製品の開発が課題だと、代表取締役の白井嘉則氏は語る。白井氏の後ろに見えるのは、心地よい海風が吹くなか、のんびり草を食む牛たち。

2013年の台風26号の土砂災害により一部通行止めとなっていた全長約6.5キロメートルの「御神火スカイライン」は2016年に復旧。海岸線から三原山展望台まで、約522メートルの標高差があり、道中、随所で絶景を堪能できる。

店でも販売され、来島したら必ず飲む観光客も少なくない。

大島牛乳は、やわらかな甘味がふくらみ、余韻は軽く実にすがすがしく、すっきりしたやさしい味わいだ。

「搾乳した乳を隣接する工場に直接パイプラインで送り、鮮度を保ったまま牛乳にできるのがおいしさの秘訣です。大島で育ち、給食でこの牛乳に慣れ親しんだ島の子どもたちは、島を離れた後も帰省の際に必ず土産に買っていくほどファンになります」

と、白井氏は顔をほころばせた。

島の中だけではなく、都心のホテルでは、大島牛乳と大島バターを使ったクロワッサンが人気だという。復活した大島の乳製品は今後、より注目を浴びる存在になるかもしれない。

若い世代の取り組みが島の活性化につながっていく

島の自然や伝統産業が守られ、受け継がれる中、あらたな視点で島の魅力を見いだそうという動きも見逃せない。その先駆けとなったのは、平成二十二年（二〇一〇）に本土から移住したトウオンデザインのデザイナー、千葉努氏とれみ氏夫妻だ。移住を強く希望したのは、神奈川県出身で大の離島好きだった努氏。大島出身のれみ氏は、当時の思いをこう振り返る。

「私自身は楽しみが多い都会での生活が魅力的で、正直大島に戻ることには気が進みませんでした。でも島で生活するうちに、時間に追われない緩やかな島の時間の流れや、自然の素晴らしさなど、若い頃には気付かなかった島の良さを感じるようになりました」

大島町商工会に就職した努氏は、れみ氏と、自分たちの島での発見や気付きをフリーペーパーで発信しはじめ、それがきっかけで、自然、食、暮らしなど多彩に大島の魅力を伝えるウェブサイト「伊豆大島ナビ」の立ち上げにも携わることになる。

さらには、コミュニティスペース「ｋｉｃｈｉ」を誕生させ、イベントを中心に島内外の人々を結ぶ場を提供。学生から年配の方々まで幅広く人の輪が広がる中、大島に魅せられて移住したいという相談も受けるようになった。

令和二年（二〇二〇）以降はコロナ禍でイベントの中止が相次いだが、活動範囲はむしろコロナ前より広がりを見せつつあると努氏は力を込めて語る。

「観光客の減少で影響を受けた土産店や漁協の加工部と連携し、オンラインでの特産品販売やイベントなどあらたな取り組みが重ねられています。フリーペーパーやウェブサイトの取材をはじめ、この一〇年の出会いが実っています。小さな島だけに、いろいろな人とのつながりが大切だとあらためて実感しました」

移住、あるいはUターンした若い世代が空き家を活用した飲食店

今後は「あんこさん」をはじめ長い歴史の中で受け継がれてきた島の伝統文化を磨き、地元の人々の理解を得ながら新しいスタイルでの発信をしていきたい、と話すトウオンデザインの千葉努氏とれみ氏。

2021年4月にスタートしたウェブサイト「東京都離島区大島」では、飼料に椿油の搾りかすを使う完全放牧の養豚や空き家のリノベーション活用といった大島の最新情報を盛り込みつつ、島内外の人々の思いをつなぐ。
（写真提供：トウオンデザイン）

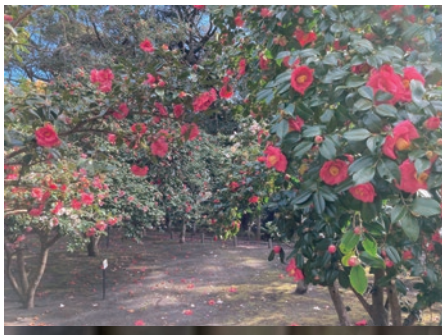
や一棟貸しの宿を始めるなど、あらたなチャレンジが島内の各所で進んでいるとれみ氏は話す。

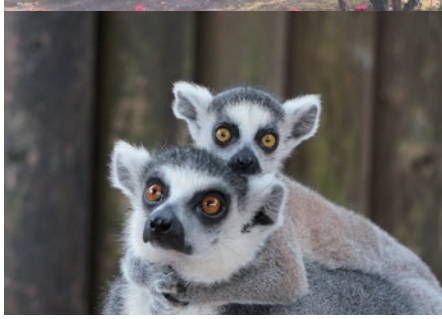
「若い世代が頑張ってくれているおかげで、島内のあちらこちらで多彩な活動が見られるようになりました。これまでは発信をメインにしてきましたが、今後は、そうした島内のさまざまな活性化の取り組みを支えるべく、裏方として人をつなげていきたいと思っています」

令和三年（二〇二一）四月には、努氏が大島の情報ウェブサイト「東京都離島区」をスタートさせた。

「大島は離島でありながら、東京に近い。再開発が進む竹芝エリアと、大島という火山島。そのつながりや両者のギャップを、東京都離島区で表現できたらと思っています。将来的には、伊豆諸島のほかの離島とも連携していきたい。それぞれにまったく異なる特徴や風俗を育んでいる島を巡り、東京の離島の多様性を感じてもらえるようなツアーができたら、と思っています」

北西部の「サンセットバームライン」と呼ばれる道を行けば、文字通り圧倒されるほど美しい夕日が見られる。





島の東に位置する「都立大島公園」は、園芸品種と自生を合わせて9000本近い椿の木が育つ。公園内にはワオキツネザルほか約60種の動物が展示、飼育されている動物園があり、家族連れにも人気の場にもなっている。
（写真提供：都立大島公園）

島の未来を担うのは人口減少対策と産業振興の連動

三原山が生んだ伊豆大島ジオパークという自然、椿油や畜産業をはじめとする伝統産業。数多くの宝物がある一方で、地方が共通して抱える人口減少への対応を町長の三辻氏はこう話す。

「現在開発準備が進められている洋上風力発電は町の活性化という点で期待をかけています。大島の高校生は卒業後、多くが島外に出てしまいますが、就職先があるなら島に残りたいという声をよく聞く。町にとって、人口減少対策と産業振興は連動した課題だと思っています」

また、三辻氏によれば、移住希望者向けの「島暮らし体験」や、住居や一時金が支給される研修付きの新規就農事業も行われているそうだ。そのほか、トライアスロンや自転車レースなどスポーツイベントが数多く開催され、大島はサイクリストの聖地ともいえる場所になっているという。さまざまな仕掛けを通して島に魅せられた人の行き来が増え、交流が深まっていけば、住む人も島の魅力を再認識するきっかけになるだろう。

噴火の際、たとえ溶岩に覆われて一面真っ黒に焼けても、大地は歳月をかけて再び緑色に再生する。島の営みや人々の思いもまた、静かに、そしてゆっくりではあるが前進を続け、未来が少しずつ切り拓（ひら）かれようとしている。

写真の「再生の一本道」は、噴火の際の溶岩流で焼き尽くされた大地が、長い歳月をかけ、生態系の営みの中で草原や森へと育つ、まさに生命の力がよみがえる過程を見ることができる貴重な場所だ。